

西三条第跡出土の遺物 2

陶磁器

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



1



2



3



4

輸入陶磁器 平安時代の最高級の食器は中国大陸から輸入された磁器です。磁器には、青磁と白磁がありますが、西三条第跡では白磁が多数出土しました。

白磁には椀・皿・托があります。1は白磁の五輪花稜皿です。口縁端部に切り欠きを入れ、内面には稜を作り出しています。また、口縁を花びらのように加工する技法は「輪花」と呼ばれ、中国磁器に独特のものでした。この技法は国内で生産された緑軸陶器や灰軸陶

器に大きな影響を与えます。2は白磁五輪花托の上に白磁五輪花椀を重ねたものです。托は出土品としては珍しく、口縁端部の切り欠きと内面の稜は1の稜皿と同じですが、さらに口縁を内側に折り返し輪花を強調しています。上に乗せた五輪花椀は、体部を縦方向にくぼませて器全体を花びらのように加工しています。

青磁には椀と合子があります。3は合子蓋です。口径5.4cmの小型品ですが、天井には花びらの文

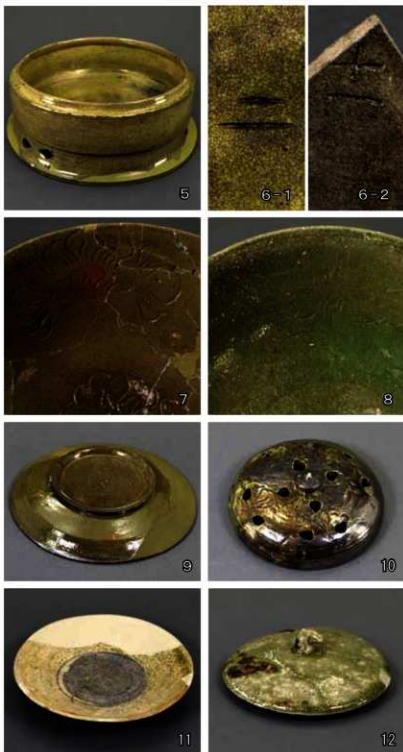
様がヘラで彫り込まれています。陰刻花文と呼ばれる技法で、次に紹介する緑軸陶器や灰軸陶器にも用いられており、輪花と同様に国産陶器に影響を与えたと考えられます。

緑軸陶器 素焼きした素地に鉛や銅を含む釉薬をかけて緑色に発色させた国産の陶器です。尾張、山城、近江、美濃、長門・周防などで焼かれましたが、尾張狼投窯の製品が最も出来が良く、平安京をはじめとして各地の上層階級に

好まれました。

4は稜碗を高台側から見たものです。体部の稜線や高台の端で緑の釉薬が剥げ落ちており、長期間使い込んだため、釉薬が磨り減ったことが想定されます。このような猿投産の高級品は、長く大切に使用されたものとみられます。5は猿投産の口径が17cmもある大型の香炉で、底部に「二」の線刻があります(6-1)。これより小型の香炉の底にも「十一」の線刻があることから(6-2)、これらは数字とみて間違いありません。粘土が乾かない段階で線刻されており、生産現場で付けられたことは確実です。当地から香炉が発注され、注文を受けた側は器に記号を刻むことで製品を区別したのではないのでしょうか。7は猿投産の碗の内面の陰刻花文です。緑釉陶器では碗、皿を中心に多数見ることができます。8は山城産の碗に彫られたものです。猿投産緑釉陶器の陰刻花文を模倣していますが、文様が細く、製品自体の仕上がりも見劣りするものとなっています。9は猿投産の皿で、釉薬の発色が美しいものです。10は香炉蓋ですが、表面が黒く変色し、銀色に光る部分も見られます。地中に埋まっていた間に還元作用によって銀色に変色したため、平安時代の人びとがこのような色調を見ていたわけではありません。口径8cmに満たない小型製品は、透かし彫りの細工が施されています。

灰軸陶器 樹木を焼いてできた灰を釉薬としてかけた陶器で、緑釉陶器と同じく猿投産が多く平安



京にもたらされました。西三条第跡では、緑釉陶器のおよそ3分の1ほどの出土量でした。

器形は皿・碗がおもなものです。緑釉陶器がほぼ全面に施軸するのに対し、11の皿は、器の底部内面と高台の内側は重ねて焼くために釉薬がかけられていません。内面には墨痕が残っています。無釉の

部分を利用して硯に転用されたのでしょうか。このような灰軸陶器には墨書も多く見られます。12は壺の蓋です。つまみは真上に立ち上がるのではなく、片方に曲がっています。わざと折り曲げたのでしょうか。鳥の頭部に見えますが、皆さんはいかがでしょうか。

(丸川義広)